

建設時評

嘘ではない嘘

東北大学大学院 情報科学研究科 准教授

平野勝也

世の中には、「嘘ではない嘘」というものがある。例えば、コーンフレークのパッケージ。含まれている栄養素について、誇らしげに表記してあるものを見たことがある。しかし、よく見ると、牛乳200cc分を含むと小さく書いてあったりする。その商品が誇るべきは牛乳の栄養素と言うことか。書かれていることは、嘘ではないが、嘘である。綺麗に栄養バランスがとれている様子をレーダーチャートで示してある商品もあった。しかし、そのレーダーチャートには、一般的に大切だと言われている栄養素の軸がなかったりする。これも、嘘ではないが、嘘である。食品の宣伝だと他にも、「レモン何個分のビタミンC」という表現をよく見る。そうした宣伝のレモンの数が100個とか、あまりにも多いことから、冷静に考えると、おそらくレモンは、そのイメージほどには、ビタミンCを多く含んでいないと言うことなのだろう。そう考えると、「レモン何個分のビタミンC」。これも、嘘ではないが、嘘である。

インターネットに情報が氾濫する現代においては、嘘を見抜く力だけではなく、こうした「嘘ではない嘘」を見抜く力も、同時に必要なのかも知れないと、つくづく思う。

* * *

国土交通省で、こんな謳い文句を見たこと

がある。「英国の道路の舗装率は100%、日本はおよそ80%で、先進諸国と比して日本の道路整備水準はまだ低い。したがって、もっと道路整備をしなければならない。」というものである。100%とは強烈である。

実は、随分前に、筆者は1年ほど英国に滞在したことがあるが、その滞在中に、あるイベントに車で出かけた。大きなイベントなので、通常の駐車場では足りないと言うことで、近隣の農地が、そのまま臨時駐車場となっていた。イベント中に降った雨のため、帰りに、農地はぬかるみ、スタックする車が多数。筆者の車も例外ではなかった。困った時はお互い様。初めて出逢った者同士、泥まみれになりながら助け合い、何とか駐車場を出たものの、今度は、道のぬかるみでスタック。今から思うと良い経験であったが、ちょっと待て。英国の道路は100%舗装されているのではなかったのか？

英国の片田舎に行かれた方なら、お気づきと思うが、実は英国にも未舗装道路はたくさんある。一体どういうことか。種明かしをすれば簡単で、実は、英国の行政上、道路とは「舗装された道」のことを言うのである。舗装率が100%なのは当たり前である。この定義を用いれば、どんな途上国でも舗装率100%である。これも、嘘ではない嘘である。

もちろん、筆者の英国での生活感覚から情緒的に言えば、確かに英国の道路整備水準は日本より高い。国土を縦横無尽に高速道路が整備され、中核都市の多くは、外郭環状高速道路を持つ。地形が緩やかで、かつ、人の住んでいるところ、住んでいないところが明確に別れていることから、英国の道路整備コストは、日本に比して、驚くほど安いのであろう。だからこそ、このような道路整備が可能であった。とはいえ、それは原因であって結果ではない。結果から見れば確かに、英国の道路整備水準は高い。そう断言して良い。しかし、それを舗装率で示せば、嘘ではない嘘になるのである。

* * *

さて、実は、行政が用いる「嘘ではない嘘」は、「舗装率」のような数字のマジックだけではない。「我が省は、時代に対応し、こんな新しいことにも取り組んでいます。」

という宣伝を、昔からよく聞くが、こうした行政の新しい取り組みの中にも、「嘘ではない嘘」が紛れ込んでいる。例えば、国土交通省が、「景観に配慮した社会資本整備に取り組んでいます」という謳い文句を使ったとすると、これも嘘ではない嘘になる。志高い行政担当者の力で、確かに景観を考えた社会資本整備が進んできており、良いものが出来たと地域住民に素直に喜ばれ愛される社会資本が増えてきているのは喜ばしい限りである。しかし、残念ながら、相変わらず標準設計的な社会資本整備が大多数である。つまり、「景観に配慮した社会資本整備に取り組んでいる」ことは嘘ではなく、紛れもない事実だが、「景観に配慮した社会資本整備に取り組んでいます」という謳い文句は、その背景にはあまたの「景観に配慮しない社会資本整備」が存在していることを、隠すような言い回しになってしまうのである。ごく一部の存在を肯定することで、あたかも全体がそうであるように見せる、取えて悪く言えば、詭弁であろう。

霞ヶ関では、こうした、未だ一部にすぎない、新しい取り組みについて、消極的文脈では「アリバイ」と呼び、積極的文脈では「アドバルーン」と言うのだそうだ。「時代に対応し、こうした施策を、なぜ実施しないのか？」と糾弾されたとき、「(ごく一部ですが) やっています」と応えられるように、「アリバイ」を用意するといったように使用する。予算要求や、対外的にアピールするときに、「(ごく一部ですが) こうしたことも取り組んでいます」と言うことで、衆目を惹きつけ、「なんだ、〇〇省も頑張っているじゃないか」と思わせる手段という意味合いであれば「アドバルーン」となる。いずれにせよ、「ごく一部ですが」を、取えて言わないのがポイントである。

とはいえ、「アリバイ」や「アドバルーン」というのは、随分と自虐的な物言いである。どの省庁もそうなのだろうが、国土交通省の行政担当諸氏は、今の時代に対応する社会資本整備のため、知恵を尽くし、新しい政策を立案してくれている。その殆どが、大変重要で必要な施策である。しかし、社会資本整備の制度というのは、大変複雑である。関

係者も恐ろしく数が多い。その全てを統括して、新しい施策を抜本的に展開するというのは、たかだか2年程度の任期では、殆ど不可能に近い。そのため、例えば「〇〇モデル事業」という形で、事業全体から見て、ごく一部で、テストケースのように実績を作り、その評価が固まり仲間が増えれば、徐々に拡大し、最後には本格的に展開するという段階を経る。「近自然河川工法」に始まった「多自然川づくり」が、河川法の目的を変更するという抜本改正に繋がったことは、記憶に新しい。「嘘ではない嘘」が、「嘘ではない『真』」になったのである。大きな組織、複雑な制度は、一朝一夕に変えられるものではないということを考えれば、わざわざ、「アリバイ」や「アドバルーン」といった自虐的な表現を用いることもないと思うのだが。

近年の国土交通省は、こうしたアドバルーンに、きちんと、「何年までに何力所整備します」といった数値目標まで出すようにしているのだから、「嘘ではない嘘」度は随分下がってきたのである。だからこそ、「もっと、こうしたい。こう変えなければいけない」という熱い思いが伝わるアドバルーンになって欲しいと思うのだが、行政が書くこうした文書が、未だ、そうは見えず、「嘘ではない嘘」を感じてしまうのは、筆者にもある先入観のなせる技だろうか。

* * *

「来年のことを言う」と鬼が笑う」と言うが、今現在に関して言えば、「『来月』のことを言う」と鬼が笑う」である。筆者がこの原稿を書いているのが8月初旬である。現時点では、またぞろ各政党から沢山の「アドバルーン」が打ち上がっているだけの状態である。月末の総選挙を終えた日本が、一体、どうなっているのかは、今の筆者には知る由もないが、これだけ打ち上がったアドバルーンが、きちんと国民の審判を経て選ばれた、正しきアドバルーンとして、ごく一部のものから、着実に、本格施策に展開していくものになればよいと、そう思うのである。